



連瀑につぐ連瀑・爽快な夏の沢を堪能

## 飯豊連峰 内ノ倉川 七滝沢

—山川

【日時】2006年8月17日（木）～18日（金）

【メンバー】木下L、矢野、高柳、山川

当初予定していた朝日の金目川は、不安定な天候のため前日に飯豊の七滝沢へと変更となった。木下さんは2度目であったが、よい沢だから、と私たちに合わせてくださった。しかしあれほど楽しみにしていたお盆休みにもかかわらず、お盆前半の朝日泥又川で大量のアブたちを目の当たりにして、すっかり気をそがれてしまった。ビッシリとたかってくるアブを思い出すだけで、ぞわあと肌が栗立つ。貴重なお盆休みがアブとセットでやってくるなんて…、嘆息しながらの再出発であった。

ところがあけて17日。早起きしてむかった内ノ倉ダムでは、覚悟した出迎えはなく、わずかに数えるほどのアブがブンブン挨拶にきただけだった。内ノ倉川沿いの林道を45分ほどで、七滝沢出合いに到着した。拍子抜けするほどに、平和で順調なすべり出しである。ただもう感謝。だんだん先が楽しみで心が跳ね上がってくる。

最初は、大きな白い岩がゴロゴロころがる河原歩きからスタートする。まもなく小滝をいくつか越え、本日の核心部である連瀑帯にさしかかる。10mの滝を左岸にまいて藪の中から見上げると、5段100mが連なって落ちている、見事な眺めだ。そのまま踏み跡に従い巻き上がる。日差しは強く、すぐに大粒の汗が吹き上がってきた。100mくらいはあがったろうか。滝の音が遠ざかり踏み跡もとだえたので沢床におりると、細い支流が現れた。自分が先頭を歩きながら、途中で地図を確認せずに踏み跡に誘われるまま稜線を上がってしまったので、本流から逸れていた。本来は10m滝を巻いた後、一度沢床におりて、本流沿いの尾根をまかなくてはならなかった。木下さんがすぐに気づき、1本向こうの尾根に軌道修正する。

5段100mの落ち口付近で今度は正しく七滝沢に降り立つと、そのまま小滝が切れ目なく続く。すぐに7段130mがあらわれる。モーグルの斜面のように、ストーンと小気味よく森に穿たれた白い水の束は、陽光を反射してまぶしいほどだ。

右岸沿いに高巻く。皆が熱中症ぎみでくらくらしている中、矢野さんは息の切れる様子もなく、藪の中をすたすたあがっていく。今日は、新潟市や長岡市では観測史上最高気温の38度を記録したそうだ。38度といたら体温を超えている。どおりでサウナの中で縄跳びでもしているような気分だった、と思ったのはあとのことで、このときは頭がぼーっとしてただ機械的に先を目指した。

本流の水は、外気と岩からの照り返しによって、ぬるま湯になっている。ちょろちょろと湧き出た清水を探して頭をひたすと、すーっと目が覚めるようだった。

ここで、高柳さんのビール破裂事件がおきた。悲惨なのは、堅くパッキングした内側でのハプニングであった点で、高柳さんの装備は香ばしくビール漬けになった。せ

っかくかつぎあげた宝物が泡と消えた本人の落胆は言うまでもないが、晩の楽しみが目減りしたような物悲しい雰囲気メンバーをも包み、わずか 500ml の液体の与える影響力の大きさに、ただひとりお酒に至上の価値を見出さない私までも、悄然とこの事態を見守ったのだった。

ビールの後片付けをして、気分も新たに立ち上がる。そうして再び真夏の照り返しの中へ、4つの影が時にふらふらしながら、ほとぼしる水流にいざなわれて行った。



←↑連瀑がつづく

4段 60mを水線通しに登っていく。登りきると斜度が穏やかになり、ゴーロの合間にたまに小滝が現れた。そろそろ陽もかたむいてきたのでテント場を探しながら、ゆったり遡行する。16:00 少し前に、十字に左右から支流が合わさる地点に快適な幕営跡があり、ここを今日の宿とした。

木下さん、高柳さん、矢野さんの3人が、3方に分かれて釣りにいった。

高柳さんと矢野さんは毛ばりに挑戦である。えさを使わずにすむなんて、なんてすぐれた技法だと驚いたが、きけば随分高度な技であるようだ。しかし高柳さんは本日何度目かの災難に見舞われた。大切な竿が、まさにこれからというときに折れてしまったのだ。戻ってきて、まき割りを手伝ってくださった。

まもなく、木下さんが4匹もつりあげて、お刺身を作ってくださいました。はじめていただいた岩魚のお刺身は、弾力があってさっぱりとしておいしかった。矢野さんはこの時は釣れなかったが、こつをつかんだのか翌朝早くに再びでかけて3匹つりあげリリースして帰ってきた。

暑さで体力も使ったのだろう、夜は虫も気にならずぐっすりと寝た。

翌朝は、6:00 すぎに出発。昨日とうってかわった穏やかな溪相が続くが、小滝が連

続いて楽しい。18m滝はザイルをだして左岸側を木下さんがリード。つづく三つ釜の滝は奇異な景観で思わず頬もほころぶ。



矢野さんは終始、その名のとおり矢のように先頭きって泳ぎ滝にむかっていく。木下さんがルートと時間とパーティー全体のバランスをみて、ここはまく、ここは荷揚げをしてまっすぐ突破しようと次々判断していく。それぞれ初顔合わせもあったり、会って日の浅いメンバー同士であるが、静かな連携のとれたパーティーだった。

10:00 溪は徐々に狭まり、高度も上がってきた。けれども上から放流しているというだけあって、魚影はどこまでいってもひらひらと見え隠れした。山頂の稜線もみえてきて、先にめどもたったことだし、ここは最後の釣りタイム。ということで木下さんが淵に竿をさす。皆で息をひそめて竿の先をみつめる。間髪をいれずに1匹の岩魚が宙にはじかれるようにはねて、竿の先にぶら下がっていた。

そのときふと木下さんが言った。『あ、ぶどう虫が脱走をはかっている。』

何の拍子にか、ぶどう虫をいれたパックが石の上に転がり落ち、房からはいでてきたようだ。なにげない出来事だったが、はっとした。ぶどう虫の脱走という言葉は忘れがたく刻まれて、脱走へと至るぶどう虫の一生が走馬灯のようにぐるぐる頭をめぐる。不気味なぶどう虫ではあるが、なにか他人とは思えなくなった。

その後はつめとなり、小さな滝をいくつか越すと、いよいよ源頭となった。顕著な藪もなく、12:15に山頂到着。雲が走っている。

日本海から飯豊本峰まで、ところどころ雲の中だが、ぐるりの展望がすばらしい。

濡れた装備を干して『魔法の一滴入り紅茶』（若干1名は素の紅茶）をいただき、大休止した。夏らしい一日で爽快。



携帯が通じたので、新発田のタクシーを16:00二王子神社に予約して、13:30に出発した。キスゲ（と、木下さんが教えてくださった）の群落をこえ、急な木立の間をぐんぐん降りて、しゃくなげの森で一服したのち、さらにおりて、手入れされた杉の森を抜けると二王子神社についた。時間前にきてくれたタクシーで内ノ倉ダムへ。車を回収し、みかみ温泉寿の湯につかり、道の駅阿賀の里で宴会・仮眠ののち翌19日午前中帰京した。夏らしい沢を2日間十二分に堪能した。

【グレート】3級

【行程】8/17 内ノ倉ダム(8:00すぎ)～七滝沢出合い(8:50/9:00)～幕営(16:00)

8/18 幕営地点(6:15)～稜線(12:15/13:30)～二王子神社(15:30)

【地形図】1/25,000 地形図 二王子岳・上赤谷